Nishibeppu National Hospital

にしべっぷ

2018-2号
平成30年４月

発行所　独立行政法人 国立病院機構　西別府病院
住　所　〒874-0840 大分県別府市大字鶴見4548番地
TEL 0977-24-1221　　FAX 0977-26-1163
ホームページアドレス　http://www.nbnh.jp/
印　刷　有限会社 中央印刷

日本医療マネジメント学会　第18回大分県支部学術集会にて

目　次

平成30年度を迎えて …… 2
日本医療マネジメント学会
第18回大分県支部学術集会を終えて …… 3
小さな不適切な関わりの積み重ねが虐待へとつながる
～障害者虐待防止を考える～ …… 4
東病棟行事 …… 5
地域医療連携室だより …… 6
おしらせ「NHO PRESS」…… 6
職場紹介 …… 7
退職のご挨拶 …… 8
人事異動 …… 9
外来診療担当表 …… 10
ボランティア募集 …… 10

理　　念　私たちは、常に研鑽し、患者さまのために最良の医療を提供します

基 本 方 針　1.患者中心の医療　2.患者の権利と尊厳を守る　3.政策医療の推進　4.地域医療への貢献
5.最良･安全医療の提供　6.チーム医療の推進　7.経営基盤の確立

患者さまの権利　1.良質で安全な医療を受ける権利　2.十分な説明を受け、質問する権利
3.自分で医療の内容を決定する権利　4.プライバシーを保護される権利　5.カルテ開示を受ける権利
6.セカンドオピニオンを受ける権利　7.臨床研究への参加と拒否の権利

平成30年度を迎えて

院長
後　藤　一　也

西別府病院の広報誌をご覧いただき誠に有難うございます。平素は大変お世話になっておりますこと感謝申し上げます。平成30年度も引き続きよろしくお願い申し上げます。

今春は天候にも恵まれ、病院の桜が満開の中、退職、転出する職員を送り、新採用、転任の職員を迎えて新年度が始動しました。病院を離れる方々には感謝の念をお伝えするとともに今後の益々のご活躍をお祈りします。転入者は国立病院機構九州グループ管内の多くの施設からの異動で、新採用者は31人にのぼります。他施設での経験や若い力などが病院の更なる活性化につながると期待しています。

平成29年度の当院の収支状況は28年度と比べ一段と悪化しております。４月からは平成30年度の診療・介護報酬の同時改定、第７次医療計画がスタートし、医事や看護部門を中心に対応しております。これらの背景にある医療政策の方向性は、地域包括ケアシステムの構築や地域医療構想の推進による、在宅医療の強化や病院機能の分化、連携などです。当院は政策医療とくに障害者医療を中心に医療サービスを提供しておりますが、長年培ってきた医療技術等を地域や在宅医療に貢献させるべく、病院機能の発信、連携の推進などに力を入れていきます。

平成30年の病院目標として、以下の２つを掲げました。

１．病院機能を高め、地域・在宅医療に貢献する。
（医療の質向上・チーム医療の推進・病院情報の発信・医療連携の推進）

２．経営基盤を確立する。
（患者数確保・経費節減・効率的な業務遂行と会議運営）

病院目標に沿って職員一同力を合わせて、患者さんはもとより地域や皆様方にとってより良い病院となることを目指します。また、職員ひとり一人にとっても自らの願いが叶うような病院となりたいと考えております。皆様におかれましては引き続きご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

日本医療マネジメント学会 第18回大分県支部学術集会を終えて

副院長
学術集会事務局長
原　　政　英

2018年２月17日、別府国際コンベンションセンターB-Con Plazaにおいて日本医療マネジメント学会第18回大分県支部学術集会（会長：後藤一也院長）を開催いたしましたのでご報告申し上げます。

第18回支部学術集会では「チーム医療を通した医療の質の向上」をテーマとして、特別講演（１演題）、シンポジウム（５演題）、教育講演（１演題）、ランチョンセミナー（１演題）、および一般演題（15演題）を企画しました。

特別講演では埼玉医科大学国際医療センター病院長の小山勇先生から「職員全員で取り組む医療安全と質の向上－系統的マネジメントの重要性－」のタイトルでご講演いただきました。自施設のシステムを例に、「優れた個人プレーではなく、より高い品質のケアを提供するためのシステム・プロセスを形成することこそ病院に求められているものである。」という強いメッセージをいただきました。

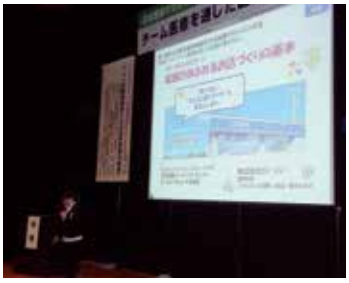
シンポジウムでは、「多職種連携による在宅医療の推進」をテーマに５名の先生によるセッションが行われました。赤嶺晋治先生（大分県厚生連鶴見病院特任副院長）からは「多職種連携による在宅医療の推進－緩和ケアを通して－」と題して、在宅で終末期を迎える時代の到来にあたり、在宅医療推進のための課題について講演されました。尾崎由衛先生（当院歯科医師）からは、「在宅医療における歯科の必要性」と題し、在宅医療を行う上で、歯科による「口腔衛生状態の改善」、「誤嚥性肺炎予防」、「口腔環境調整」および「安全な経口摂取のサポート」の重要性について講演がありました。児玉淳先生（有限会社きむら薬局代表取締役）は、「多職種連携にむけた薬局薬剤師の課題と役割」と題して、「かかりつけ薬剤師制度」を活用した内服薬の総合的管理・ポリファーマシーの解消についてご講演いただきました。佐々木真理子先生（大分豊寿苑看護ステーション）は、「看護師の立場で考える在宅療養を推進するための多職種連携とは!!」と題して、多職種連携による在宅医療における情報共有の重要性について講演されました。板井一弘先生（こうざきデイケアリハビリテーションセンターもみの木）は、「訪問リハビリにおける理学療法士の役割－理学療法士にもできる事－」と題して、ゼネラリストとして対象者に向かい合うことが訪問リハビリにおいて重要であることを強調されました。総合討論では、在宅医療推進に向け、多職種のなかでも医師の積極的参画が重要であることが確認されました。

教育講演では、みえ病院副看護部長、安部幸先生に「摂食嚥下リハビリテーションにおける多職種連携」についてご講演いただきました。高齢化社会を背景として誤嚥性肺炎予防が重要視されているなかで、予防的視点から多職種が連携し摂食嚥下リハビリテーションに取り組んだ貴重な事例を紹介されました。

ランチョンセミナーでは、株式会社ローソン運営本部シニアスペシャリストの清水とみか先生に「笑顔あふれるお店づくりの基本」と題してご講演いただきました。「おもてなし」を極めるため、「オーナー、店長、そして『クルー』と呼ばれるアルバイトが協力体制をとることが重要。」と楽しく伝えていただきました。

一般演題では、「地域連携・チーム医療」、「医療安全・感染」、ならびに「患者援助・教育・経営参画」の各領域からそれぞれ５演題をご講演いただきました。いずれの演題も学会テーマである「チーム医療」の概念が反映されたものであり、質の高い演題ばかりでした。演者の先生方に感謝申し上げます。

学会準備にあたり、平成29年７月に第１回準備委員会を立ち上げ、ポスターおよびプログラム作成に着手いたしました。９月には学会ホームページを開設し講演依頼ならびに一般演題の募集を開始しました。10月からは抄録集作成に着手しました。11月は学会運営を支えていただく協賛企業の皆様のご理解ご協力を得ることに注力しました。12月にはシンポジウム打ち合わせ、本年１月には抄録集の最終調整、印刷を行いました。おかげをもちまして、当日は支障なく運営することができました。ご支援ご参加いただきました医療機関の皆様、学術集会に協賛賜りました企業様（49社）、当院準備委員の皆様、ならびに学会当日の運営を支えていただいたスタッフの皆様に深く感謝いたします。



小さな不適切な関わりの積み重ねが虐待へとつながる

～障害者虐待防止を考える～

療育指導室長　能　美　禎　夫

平成29年３月28日に国立病院機構宇多野病院における虐待行為に対して、京都市福祉局から改善勧告と行政処分（３ケ月間新規利用者受け入れ停止）が実施された。京都市の調査で３つのことが明らかになった。

①看護師の利用者に対する虐待行為

②虐待行為の再発を防止できなかった病院の不適切な対応（虐待と認めないことや根本的な再発防止策を行っていないこと）

③病院運営の問題（虐待防止の取組の不徹底、運営上の問題に対する不作為）

宇多野病院において、当該行為が心理的虐待等であるとの認識が不十分であり、徹底した再発防止に取り組むことができていませんでした。

国立病院機構として、行政処分及び改善勧告の内容を重く受け止め、障害者に対する虐待行為は、障害者に対する医療や療養介護サービスを提供する医療機関としてあってはならないことです。

当院においても、宇多野病院の虐待行為に対する行政処分等をうけて、昨年12月に障害者虐待防止に関する規程等を大幅に見直しました。虐待防止の啓発活動を主な活動とする障害者虐待防止部会と虐待等が発生、通報があった場合に対応する障害者虐待防止委員会の２つの機関を設けました。そして、年３回の研修、年２回の「障害者虐待防止／職員セルフ・チェック・リスト」、虐待防止月間の実施や虐待通報の流れも分かりやすく改訂しました。

当院の障害者虐待防止の運営に関する形は整いましたが、職員一人一人の障害者虐待防止に対する意識は不十分ではないかと思います。そのためにも年３回の研修の徹底、「障害者虐待防止／職員セルフ・チェック・リスト」等で各職員の振り返りが必要です。

日頃の業務の中で「小さな不適切な関わり」に各職員が気づき、反省することが大切です。そして、他の職員の「小さな不適切な関わり」を注意できる職場の雰囲気をつくることも大切です。

「黙って病室に入る」、「何も言わずに介助する」、「成人の方を『ちゃん』づけで呼ぶ」、「ベッド周りのカーテンを引かずに着替えやオムツ交換をする」、「食事に薬を混ぜて与薬」、「高齢者に対して子どもと同じ内容の日中活動の提供」、「必要のない身体拘束の継続」等々。

日頃の業務の中での「小さな不適切な関わり」の積み重ねが、虐待につながります。私たちは「小さな不適切な関わり」に気づき、改めなければいけません。

利用者への関わりの中で「自分自身、家族だったら、いやだなあ・・・」と思うことは、当然のことですが、利用者も家族もいやだと思います。日々しっかりと考えながら仕事をする必要があります。虐待がおこらないように、日々の業務の中で「小さな不適切な関わり」に心を配りましょう。

東病棟行事

保育士
矢　島　楽　美

東病棟（一般入院を除く）では、年間を通じて季節の行事を行っています。

2月は節分ということで、季節の節目に邪気を払いました。鬼が登場すると、小児の利用者は一瞬で表情が固まりましたが、他の利用者は笑顔が見られ、「鬼は外、福は内！」の掛け声が、病棟中に響き渡りました。

そして、3月は雛祭り。お雛飾りを各ベッドサイドで鑑賞していただいたり、東３，４病棟ではスタッフがお雛様とお内裏様に変装し、ほっこりとしたひとときを過ごしました。

外出の機会が少なく、季節を感じる機会が少ない利用者にとって、また活動に携わる自分自身も、季節の移り変わりを感じるひとときとなりました。

東３，４病棟ゲーム

東１，２病棟

東３，４病棟　お雛様と一緒にハイ！ポーズ！

東３，４病棟ゲーム

東１，２病棟

地域医療連携室だより

地域医療連携係長
安　森　洋　美

当院は、結核、ALS などの神経難病、筋ジストロフィー、重度心身障害児（者）の医療を中心に小児慢性疾患、血液内科、呼吸器内科などの慢性の医療を提供しています。

さらに、地域包括システムによる在宅医療移行、拡充が進められており、地域医療構想により病院機能の発信、提供が求められています。そのため、地域が求めている医療機能を提供し在宅医療を進めることを目的に在宅支援室の運営を強化しました。在宅支援室の業務内容としては、介護支援・訪問看護・在宅移行支援などがあります。12 月には安全に食べることをサポートする目的で摂食嚥下（のみこみ）外来を開設しました。また、重症児患者の短期入所や日中一時支援、神経難病患者のレスパイト入院なども行っており患者様とご家族への支援を行っています。

患者様が住み慣れた場所で安心して暮らしていくために、各医療機関や介護保険事業所と協力し合いながら、地域に根ざした地域医療連携室を目指していきます。

おしらせ

NHO National Hospital Organization 国立病院機構通信 PRESS

西別府病院は、国立病院機構（NHO：National Hospital Organization）という 142 の病院からなる国内最大級の病院ネットワークの病院です。

国立病院機構（NHO）という病院ネットワークが、どのようなグループでどのような活動をしているのかを紹介する『NHO PRESS ～国立病院機構通信～』を発行しています。当院では外来に設置していますので、ぜひご覧になってください。

NHO PRESS　検　索

職場紹介

・診療情報管理室
・東３病棟

診療情報管理室

診療情報管理室では、大きく分けると２つの業務を行っています。

１つ目は診療録などの管理業務として、記載内容の点検および監査、退院時総括の管理、過去カルテやフイルムなどの貸し出し管理、診療録開示物の作成などを行っています。また、他院から提供された画像データを画像管理システム（PACS）への取り込みや、逆に当院から他院に画像情報を提供するためのデータ作成なども行っています。

２つ目は病院情報システムの管理業務として、システムトラブル対応、機器トラブル対応、苦情・要望対応、操作指導、ネットワーク保守管理、サーバ群保守管理を行っています。

どちらの業務にも言えることですが、これらの業務に「ゴール」はありません。診療録などの管理では毎日精度を高める努力を怠らず、病院情報システムの管理業務では障害が起こらないように日々神経を使っています。日々の診療業務では裏方的役割ととらえられがちですが、どちらも病院の業務を円滑に遂行するためになくてはならない存在であると自負しています。

これらの業務内容を自覚するため、診療情報管理室の理念として次の内容を掲げています。

・病院の財産として診療録の価値を高めます。
・診療情報の適正な取り扱いに努めます。
・常に新しい技術や情報の修得に努めます。

我々病院事務職員は、
「医療従事者が、目の前にいる患者さんに最善の医療を提供することができる環境をつくる」
ことこそが使命だと考え、患者さんのことを第一に思い日々の業務に取り組んでいます。

（診療情報管理士　加藤英之）

東３病棟

東３病棟は重症心身障害児（者）の患者様が療養され、短期入所や一般入院も受け入れています。患者様は７歳から67歳と幅広く、人工呼吸器装着５名、気管切開10名、経管栄養21名と医療的ケアを必要とする患者様、日常生活援助を必要とする患者様が過ごされています。また、併設された養護学校には３名の学生が通学しており、学校との連携も行なっています。重症心身障害児（者）病棟には高い倫理的視点を持った実践が求められている事を実感し、多職種での治療・看護・療育を行っています。

患者様は様々な障害や合併症を抱え過ごされており、日々の変化に気づく専門性の高いアセスメント力が必要とされ、生命と生活を支える医療・看護を行っています。また、患者様は自らの思いやニーズを思うように訴える事ができないため、言葉だけでなく声や表情、身体や行動で伝えてくれる多くの心の声を聞き、ご本人のニーズや思いに寄り添いケアを実践していく事をモットーとしています。私達は患者様お一人お一人の個別性に応じたケアを考え、他職種で協働し豊かに生きる事を支援していけるよう努めていきたいと思います。

（東３病棟看護師長　福田綾子）

退職のご挨拶

お楽しみはこれからだ！

療育指導室長　能　美　禎　夫

大学を卒業して７年ほど高校で非常勤講師として勤務して、33 歳で宮崎東病院（16 年半）に入職後、福岡病院（２年）、熊本再春荘病院（２年）、大牟田病院（３年）、そして西別府病院（３年）で勤務しました。それぞれの病院での思い出はたくさん有り過ぎて、とても限られた誌面で語ることはできません。定年退職にあたって今の私の心境を簡単に述べたいと思います。小学校、中学校、高校、大学の入学と卒業、そして就職したときは、単純にワクワク、ドキドキという心境だったような気がしますが、定年退職は少し違った心境です。定年退職の話題になると、多くの方が「第二の人生」ですねと言われますが、私に言わせれば、第一の人生もまだ 0.5 くらいなのに、『第二の人生』なんて口に出すだけでもおこがましいと思っています。映画好きな方はご存知と思いますが、アメリカで 1927 年に制作された最初のトーキー映画（映像と音声が同期した映画）が「The Jazz Singer」です。私の今の心境は、まさに映画「The Jazz Singer」の最初のセリフです。

「お楽しみはこれからだ！」

36 年間の思い出

調理師長　一　宮　憲　次

私が西別府病院に就職したのは 24 歳の時で、最初の３年間は賃金職員でした。27 歳で調理師として本採用となり、当時は 18 人の調理師が病院食を作っていました。当時の患者様は約 400 人でした。また、看護学校の 120 人の生徒へ食事を提供するためにリアカーで取りに来てもらっていました。

懐かしい思い出として、４施設対抗の球技大会や慰安旅行で四国や九州各地に看護師さんをはじめ様々な職種の方々と一緒に過ごし、コミュニケーションがとれてとても良かったです。

最後になりましたが、36 年間、お世話になりました。